

J. Gonda, Selected Studies, Presented to the author by the department of Indology, Utrecht University, volume VI, Part 1 and 2, Including a bibliography of the author 1970-1991 compiled by Dory Heilijgers, E.J. Brill, Leiden, New York, København, Köln 1991, volume 1 xxiv-542, volume 2 x-581.

カルトネン著

## 初期ギリシャ文献中のインド

原 實

ヘロドトスが人間の住む最東の地、その先は砂漠（タール砂漠？）となると称したインドは、古来不思議な民族、動物の住む所、お伽話の国、そして又時に理想国として西洋古典世界の夢を誘った。但し、彼等の頭に描いていたインドは、時にエチオピアとも混同されて、その記述の対応部分を現存インド文献に求める事は必ずしも容易でない。その主たる理由はギリシャ人の知っていたインドが現在のパキスタン、アフガニスタンの東部に限られていた事、そしてこの地方は往時古典インド文化の辺境に位していたため、正統派の伝えたインド側の古い文献に正確に伝えられていない事実、又は彼等の情報がこの地方より屢べルシャ人を通して間接的に伝えられた事情に起因している。加えて所謂 *Interpretatio Graeca* の視点はこの問題を更に複雑にした。

16世紀以降、この西洋古典世界とインドとの関係は泰西知識人の関心を喚び、18-19世紀にインド古典学が確立した後も西洋のインド学者の或る者はその西洋古典学の素養、学殖より折りに触れてこの問題に言及した。著名な学者として、A.H.L. Heeren, Ch. Lassen, P. von Bohlen, H.H. Wilson E.A. Schwanbeck, A. Weber, J.W. McCrindle の名を挙げ得る。しかしながら、東西に跨るこの分野の研究は、その対象が多様な学問的領域（考古学、言語学、民族学その他）に亘り、且つは多種の言語の習得を前提とする故に、学問的厳密を期する時決して容易でない。屢々それは、*wild speculation, unfounded assumptions* とその踏襲に終始している。ヘルシンキ大学、A. Parpola 門下の著者 K. Karttunen はこの種の非学問的

推論や前提と reasonable ideas, good hypotheses とを厳密に区別し、極めて批判的且つ客観的に資料を解釈する。

通常古典時代の東西交渉史は歴山大帝のインド遠征に開幕するといわれるが、それ以前にもインドは西洋に知られていた。事実歴山大帝以後の史家も多くその記述をそれ以前の情報に拠って居る。但し、インドの名称のそもそも由来する Indus (= sindhu) は地理的にもギリシャ人の知識を主にこの地方に限定する事となった。西北インドこそが古典ギリシャのインドであったとなす視点が本書の全体を彩る基調をなしている。

本書は八章より成り、第九章は短い結論となっている。巻末は文献目録 (pp. 237-264)、引用箇所 (pp. 265-268)、索引 (pp. 269-293) となり、本書の利用価値を高めているが、中でも30頁に垂んとする膨大な文献目録はこの分野の研究史を知るのに極めて便利である。他にインドからギリシャに至る大地図と西北インドの小地図が添付され、読者の参照と理解に資している。以下に本書の内容を順次紹介してゆくであろう。

第一章の序論に続いて第二章は Historical Perspectives と題して、インダス文明とメソポタミアの関係を論ずる。インダス滑石印章を初め幾つかの遺物はペルシャ湾西岸、メソポタミアより発見され、古くからインド人が Lothal その他西ないし南インドの港より渡って西方世界に雄飛していた事を物語り、彼等の居留地の存在も立証されている。但し交易は専ら東方 (Meluhha) よりのみで、古代オリエントの文物はインド側に発見されていない。この間に、旧約聖書列王紀伝ソロモン王の Ophir, Bāveru Jātaka (339) とバビロニアとの関連も批判的、否定的に言及される。最古期インド語彙の中でメソポタミアに由来するものの比定も困難である。その意味でヴェーダ時代のインドは直接的にはメソポタミアと結び付かない。唯、西方由来のものとして文字と貨幣鑄造の問題が残るが、これはアケメネス王朝以後のものと思われる。西暦前5-6世紀、ダレイオスのアケメネス王朝下、ギリシャ人とインド人の接触のあった事は容易に想像され、ギリシャ人は Bactria 更には東、Hindukush 山脈の北部に進出して、西はイラン、東はインド、更に延びて中央アジアより情報を集めていたものと思われる。かくて古代ギリシャ史家の伝える東方の象、孔雀、綿、香料、金、宝石の類はこの時代に西側に紹介されることとなった。

第三章はインドに就いて書き残したギリシャ人とその記録を紹介する。Skylax の Periplus 断片に始まって、Hekataios の Periegesis 断片、Herodotos の Historiai, Ktesias の Indica 断片を順次紹介し、それら相互の関連を論ずる。次いで Aeschylus, Sophokles, Xenophon を初めと

するギリシャ文献一般のインド言及を集めた後、歴山大帝随行者 (Nearchos, Onesikritos, Ptolemaios, Aristoboulos, Polykleitos, Kleitarchos)、更に大帝以後 (Megasthenes, Dionysios, Daimachos 等) のインド報告に言及する。歴山大帝東征後、紀元前1世紀に至り、インドの略々全体像が西洋に知られるようになるが、西洋のインド像は却ってこの時期に固定化し、Plinius や Periplus maris Erythraei 等の少数の例外を除いて、それは Megasthenes その他の報告以上に出る事は稀となった。従って Diodoros, Strabon, Arrianos の著述はインドに就いて新知識を加えると云うよりも、寧ろそれ以前の西側の文献を知るに重要な手掛かりを提供するものとして尊重される。

第四章は屢々論じられるホロメスとインドの関係、ギリシャ哲学に及ぼしたインドの影響 (輪廻、その他) に言及し、それらを否定的批判的に扱う。

第五章は Theory and Information in Greek Ethnography と題されるが、その中でインドとエチオピアとの混同の問題が論じられる。就中、140頁に掲げられる Fabulous Peoples of India as Mentioned in Classical and Indian Sources と題される一覧表は「一足」「一つ目」「小人」等12項目に亘って東西両文献の言及箇所を表示し、一目瞭然両者の関係を明らかにしている。

上記ギリシャ資料の検討は当然それに対応するインド側資料の登場を促す。但しこの時代のインドに正確な年代の判明している文献の存在しない事は厳密な対照研究を困難ならしめる。この困難を踏まえつつ、著者は第六章でこれらに比較的近いインド側の資料を概観する。先ず西北インド出身のパールニニ及び初期文典家の諸文献、Kauṭilya の実利論、叙事詩、法典、仏典、そして最後にヴェーダ文獻 (Dharma-Sūtras) に言及している。

以上の基礎資料の検討を踏まえ第七、第八章は本書の中核部分を形成している。即ちギリシャ資料に言及されるものが、実際にインドの資料に在ってどのように比定され得るかの問題に直参する。しかしながら、既述の通り最初期ギリシャ文献のインド記述に梵語資料から我々が知り得る所と合致する部分が殆どないのが実情である。それは何に由来するか。それは両者が同じ国、同じ文化を記述しなかった事に起因している。ギリシャ人がインドと考えていたのはまさしく Sindhu=Indu に他ならず、それ以上には出なかった。加えて西北インドは往時インド文化の辺境に位し、インド側資料それ自体がこの地方に北狄西戎蔑視の類の記述を残すに留まって、両者の公平な比較対照を殆ど不可能にしている。その不利な実情を踏

まえつつ、著者は第七章に次の9項目を立て、順を追って解説している。

- 1) 鷹狩：ギリシャ側資料は Ktesias が伝える。これに僅かに対応するものとして Skt. śyainaṃpāta (Comm. on Pāṇini 6. 3. 71), pakṣiṇāṃ poṣaka (Manu 3. 162), śyena-jivin (Manu 3. 164) を挙げ得る。
- 2) インドの犬：Herodotos が伝え、歴山大帝も見聞したと言われるが、インド側には正確な対応を見ない。著者はしかし、ここでインドの獵犬、番犬、鬪犬の習俗伝統と Skt. śva-gaṇika, kauleya (血統犬) の問題を論じている。
- 3) 太い尾の羊：Ktesias が伝えるが、インド側に対応を見ない。恐らくは Pakistan, Afghanistan, 中央アジア伝承との混同があると思われる。
- 4) 犀：一角獣伝説の淵源となる一角の犀は Ktesias が伝える。角は薬用に供し、毒消しの効ありと言われ、インダス周辺が僅かに比定される。
- 5) 金を掘り出す蟻：Herodotos, Nearchos, Megasthenes が伝え、MBh. 2. 48. 4. Manorathapūraṇi 2. 239. 21その他に見える為、夙に有名となって、膨大な研究史を記録した。著者はそれらを批判的に概観した後、この伝説が中央アジアよりペルシャ人の伝え聞いたものに由来すると推測する。
- 6) 金を守る怪獣 Griffin：古来、古代オリエント美術に知られるもので、Ktesias が誤ってインドと結び付けてしまったものと思われる。
- 7) 犬頭族：Herodotos がリビヤに住むものとしたこの犬頭族は Ktesias によりインダス在住、羊飼いを生業とするものとされた。śunāmukha は、非アリアン族として Purāṇa 文献に見え、西北に住むと言われるが、Purāṇa 文献は年代的に古典ギリシャ史家と時代の隔たる事遙かである。
- 8) Silas/Śailodā：幾人かのギリシャ史家の伝えるこの泉はインド文献にあって人間界と桃源郷 (Uttarakuru) を隔て分ける河川とされる (MBh. 2. 48. 2-4, R. 4. 42. 37f.)。
- 9) Skōlēks：Ktesias の伝えるインダス川棲息の巨大うじ虫。二牙を有し、夜行性で馬、牛、らくだを襲うという。捕えられて30日日干しにすれば、可燃性の油を湛え、強大な焼却力あり、インドの王はこれを武器に用いるとされる。著者は両者の諸特徴を比較しこれを Balarāma/Śeṣa に比定している。

上記のものとやや趣を異にする対応は第八章に扱われる。

- 1) Gandharva, Yakṣa, Rākṣasa 以外の奇怪人種への言及は、Pāṇḍu 五王子の Digvijaya (MBh. 2. 28, 2. 47- 8) 記述、並びに Rāma の Sitā 探索行 (R. 4. 39) の異民族列举中に見出される。
- 2) 人食い：この Herodotos が伝える蛮族は MBh. 1. 98. 18ff. に或種の対応 (Dirghatamas) を見出すが、近代の報告によれば Kashmir の原住民 (Nāga, Piśāca) に類似の習俗を求め得るといふ。
- 3) パーンツ族：古来インドには異質の、一妻多夫の習俗を伝え、叙事詩に在って武士道を無視した彼等のもと西北インド出身の非アリアン系人種と考えられる。
- 4) 葡萄酒：Ktesias が伝えるこのインドの飲料は古来 Kashmir 地方 (Kapiśa) の原産であった。
- 5) Herakles と Dionysos：伝説上インドの征服者とされ、インドで神として崇められたこの両人は共に大旅行家として歴山大帝東征の先駆とみなされ、大帝の重要性が増すにつれて次第に重要となった。元来、両者の伝説は大帝の詔い人達の創作であったと言われる。但し、歌舞音曲の嗜好、酒宴狂騒の祭典はシヴァのそれを想起せしめ、著書は両者の接点をここに見出して、その故地を西北インドに求めようとしている。他に MBh. 8. 30に見える北狄非難 (Bāhlika, Madra = dharmā-bāhya, 飲酒、肉食、高笑、歌舞、裸、乱交) は、西北インドの原住民を Piśāca の子孫とする仮説を支持すると著書は考えている。
- 6) 太陽崇拜：Ktesias が砂漠の中に、月と太陽の寺院ありとしているものが一体何であるか比定し得ない。イランのゾロアスター教の影響か。
- 7) Taxila の習俗：少女売却、鳥葬、寡婦自殺の三が Strabon の断片に伝えられるが、そのあるものは西北インドの習俗に比定される。
- 8) 北方人の蛮風：既述の MBh. 8. 30の他に Baudhāyana-Dharma-Sūtra はその deśanirṇaya 章に北狄蛮風としてバラモンの羊毛売買 (ūrṇā-vikraya)、飲酒、両顎に歯のある動物の売買、武器売買、航海 (samudra-yāyin) の五を挙げている。バラモン商人の存在は西北インドに知られ、バラモン武士は歴山大帝の遭遇した所であった。又西北インドの港よりの周航は古くより知られている。

第九章、結論：著者は本書で三たび our Northwestern viewpoint (p.

205), our Northwestern perspective (p. 212. 231) の言辞を用い、西北インドに焦点を当てて、東西両文献資料を解釈する。そしてこの地がアケメネス王朝期、その諸都市を通してギリシャ人とインド人の邂逅した場であった事を強調する。結果的に初期のギリシャ人の伝えるインドがその西北辺境に限られていた事が明らかとなる。他面、この地は偶々初期正統ヴェーダ、バラモン教文化の圏外に位した為、その実情を正確に伝えるインド側文献に乏しい。著者は後世の文献を含め、時代的に比較的近い文献の中からこの地方への言及を極力集めて往時を復元し、少しでもその実態に迫ろう努めた。ここに本書の最も重要な意義がある。但し、文献目録に R. Shafer, *Ethnography of Ancient India* (Wiesbaden 1954), D.L. Lorenzen, *Kāpālikas and Kālamukha* (New Delhi 1972), W. Kirfel, *Śiva und Dionysos* (Kleine Schriften 210sq. ), D.H.H. Ingalls, “Cynics and Pāśupatas” (*Harvard Theological Review* 55, 1962, 281sq. ) が見えず、又時に本文中に言及されながら文献目録に挙がっていないものも二、三 (p. 56, n. 399 Woodcock 1966 : p. 113, n. 92 and 96 Schofield 1983 ; p. 119, n. 151 Brochard 1887 ; p. 219, n. 185 Srivastava 1972) 散見する。

*India in Early Greek Literature* by Klaus Karttunen, *Studia Orientalia*, edited by the Finnish Oriental Society 65, Helsinki 1989. pp. 1-293.